週刊誌アーカイブス《特別編》

種馬ハイセイコー2度目の奇跡

北海道メディア研究

道内の新聞社や出版社OB、フリージャーナリストなどで組織した団体。新聞、雑誌、テレビなど北海道を主体にしたメディアの検証を行い、健全なメディアやそこに働く人材を育成することを目的としている。

日本の競馬史上、コアなファン以外にも支持され、一大ブームを起こした馬といえば、古くはハイセイコー、そしてオグリキャップ、ハルウララだけだろう。3頭に共通するのは、エリートではない「地方競馬」の出身ということだ。日本人の琴線に触れる何かがあったに違いない。1976（昭和51）年4月1日号の「週刊文春」では、引退してもなお北海道の牧場にファンが殺到するハイセイコーの近況を、競馬評論家の赤木駿介氏が現地で取材している。

明和牧場に押しかけた30万人

赤木氏は、ハイセイコーを〈ビッグレースにおける敗北が、逆に人気を高めた奇跡の馬〉と称する。デビューは公営の大井競馬場。6戦6勝の実績を引っさげて、鳴り物入りで中央へ移籍したが、16戦7勝と敗れたレースのほうが多く、皐月賞と宝塚記念以外のビッグレースには縁がなかった。

成績だけをみれば「超一流」と呼ぶには物足りない。

〈ハイセイコーの爆発的な人気の秘密を、だれも解明することはできない。しかし、これだけはいえるだろう。怪物から怪物クン、スーパーホースからアイドルへと、呼び名が変わるたびに、ファンの数もふえ、イメージも多様になった〉

最初の挫折は、最高峰レースの日本ダービーだった。連勝記録を10に伸ばし、断然の1番人気でスタートを切ったのだが――。

〈ハイセイコーが負けるなどとは、ファンのだれも思わなかった。ゴール前三〇〇㍍地点で、ハイセイコーは生まれて初めて自分より先に行く馬を見なければならなかった。スタンドの吐息と、声にならぬ声が、十数万のどよめきと化し、ブラウン管を通じて茶の間にも流れていった。どんなにすぐれた技術者でも、あの効果音を再現することはできない〉

結果は3着。決して恥ずべき着順ではないものの、期待が大きすぎたぶん、失望も大きかったようだ。この敗戦により、競馬マスコミの目が変わったという。

〈いままでの持ち上げ方がうそのごとく、掌を返したように、ハイセイコーを論じた。もともと、ハイセイコーはそんな強い馬ではなかったのだ、と玄人っぽい見解をだすことによって、自分の立場を守ろうとした評論家、ジャーナリストが多かった〉〈だが、ダービーの敗戦から、ハイセイコーの人気は、また一段と高くなったのである。これは、ファンみずからが作りだした人気であった。ジャーナリズムは、あわてざるをえなかった。げにハイセイコーは不思議な馬である〉

▲「週刊文春」'76年4月1日号

こうした風潮は、赤木氏自身も当惑させた。ハイセイコーがデビューした昭和49年当時、フジテレビの競馬番組で解説者を務めていたからだ。

〈大衆の人気が上昇するにつれて、私は混乱しだした。八戦目のスプリングステークスのときだが、私はSディレクターに「ハイセイコーが負けるかもしれないということを、今日あたりしゃべっておいたほうがいいのではないか」と提案した。Sディレクターは即座にいった。「それはないです、赤木さん。ハイセイコーの強さを、どんどん強調してください」〉

結局、「ハイセイコーは抜群に強い馬ではない」という赤木氏の見立ては、このあとのダービーで証明されたわけだが、スプリングステークスは「フジテレビ賞」との冠がついたレースでもあり、ディレクターとしてはハイセイコーに関するネガティブな発言など受け入れられなかったのであろう。

ここからは新冠町の現地ルポを。

〈明和牧場に着くやいなや、私はハイセイコーの馬房の前に立った。そして、驚嘆し、圧倒された。つややかな黒鹿毛の馬体は、確実にふたまわりも大きくなっていたのである。変わらないのは、あのつぶらな清々しい眼であった。気品のある美しい顔であった〉

引退レースの有馬記念から1年余り。体重は530㌔から630㌔に増えていた。ギリギリまで体を絞らなければならない競走馬に対し、走力ではなく精力が求められる種牡馬の場合は、たっぷり余裕のある体が望ましいのだ。

〈昨年、ハイセイコーを見学に来たファンは、実に延べ三十万人になる。これは、驚異的な数字である。タケホープのほうには、三万人である。決して少ない数字ではないが、あまりにも差がありすぎると思うのである〉

タケホープはハイセイコーのライバルで、日本中のファンを呆然とさせたダービーを9番人気で勝利したほか、菊花賞と天皇賞・春も制覇しており、実績ではハイセイコーを凌駕していた。ハルウララなどその最たるものだが、人間の側が感情移入する競馬の世界においては、強さ＝人気とは限らないのである。

人間が伝染病を運んできたら大変

空前のハイセイコーブームは、繋養先の明和牧場に多くのメリットをもたらした。

〈観光バスガイド嬢三十八人が研修に来た。（代

続きは『月刊クォリティ』本誌をご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
https://qualitynet.co.jp/koudoku/

○お電話でのお申し込みはこちらから
TEL 011-644-0101
（9:00 ～ 17:30　土日・祝日をのぞく）